

## 税金がつなぐ命と未来

岩国市立周東中学校2年

相本 陽喜

僕はこれまで、税金について深く考えたことがなかった。ニュースで税金が上がる、減税されると聞くことはあっても、それが自分の生活にどう関係しているのか実感がなく、ただお金が取られるものだという印象くらいしかなかった。

ただその考えが、曾祖母の老人ホーム入所で少し変わってきた。そして税金を身近に感じるようになったのは、母がその老人ホームで管理栄養士として働いているという事実があるからだ。

曾祖母は数年前老人ホームで生活していた。毎日落ち着いた環境の中で過ごし、樂しみだったのは食事の時間だったと思う。ただ曾祖母は少食だった。そんな曾祖母の食事について、母から「今日は全部食べた」「甘いものを食べて嬉しそうだった」などと話を聞いて僕はほっとした気持ちになった。食べることは生きることの基本だと思う。そして、安心して美味しく食べられるということは、人生の質を左右する大事な要素だとも思う。

その曾祖母の食事を支えているのが僕の母だ。母は老人ホームの管理栄養士として、高齢者一人ひとりの健康状態や噛む力に合わせて提供内容を考えたり、調理スタッフに指示を出したりしている。母はよく「おばあちゃんが完食してくれると嬉しい」と言っていた。その言葉には、ただの仕事以上の思いが込められていたように感じる。

このような老人ホームの運営は、介護保険制度によって支えられている。その介護保険制度は、国民が納める税金によって成り立っている。つまり、曾祖母が安心して暮らしていたのも、親が専門的な仕事をする環境が整っているのも、税金の支えがあってこそなのである。僕はこの事実を知り、税金が誰かの「いただきます」や「おいしかった」を支えているのだと実感した。

税金は学校、病院、消防、警察など僕たちの生活のあらゆる場所で使われている。しかし、それだけではなく、未来をつくる投資でもあると思う。曾祖母が支えられていたように、いつか僕や、これから生まれてくる子どもたちも、税金によって支えられる日が来るかもしれない。税金は今を守ると同時に、次の世代へつながっていく橋のようなものだと思う。

これから数年後には、僕も社会人として働き、税金を納める立場になってくる。そのときはただの義務としてではなく、誰かの暮らしや笑顔を支える一部になれると思いながら、誇りを持って税金を納めたいと思う。そして、税金が正しく、公平に使われるよう、僕も関心を持ち続けたいと思う。